

降誕節第 3 主日 説教 「大胆に、そして、しなやかに」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2023 年 1 月 8 日

マタイによる福音書 13 : 44-52

年が明け、2023 年が始まりました。大勢の人たちが迎えたこの年の幸多からんことを願い、大きな期待を抱きながら一週間を過ごしたことでしょう。ただ、そうした世の喧噪とは一線を画しているのが私たちキリスト者でもあるのでしょう。なぜなら、私たちにとっての新年とは、クリスマスの祝いのただ中を心静かに迎えるものでもあるからです。そして、そこで大切なことはクリスマスシーズンに終わりを告げる公現日、エピファニーです。その日、主の教会は御言葉からイエス様の洗礼の出来事、あるいは、カナの婚礼の出来事などを聞き、イエス様の救い主キリストの歩みが始まったことを覚えるのですが、それは、この公現日が救い主キリストが世界、人類と共にあることを宣言するものでもあるからです。このことはつまり、一昨日の 6 日より、世界、人類はキリストと共にあることを改めて強く思うことになった、全世界がクリスマスを祝ったことを思えば、それは、当然のことでもあるのでしょう。ですから、そういう意味で、この日の御言葉は公現日を迎えた私たちにふさわしい御言葉だと言えるのです。

ここでイエス様は弟子たちに向かって天の国について三つの譬えをもって語ります。そして、51 節では、イエス様が弟子たちに向かって「あなたがたは、これらのことが皆分かったか」と尋ね、そして、声をそろえ弟子たちが「分かりました」とこう応えているわけです。つまり、イエス様に対し、「分かりました」といっているこの弟子たちの姿こそが御子を迎え、御子と共に歩む世界、人類の姿であるということです。ですから、ヨハネによる福音書が、「わたしを信じる者が、誰も暗闇の中にとどまることがないように、わたしは光として世に来た」と語るように、まばゆいばか

りのイエス様という光に照らし出されているのが世界、人類でもあるのです。従って、この日の御言葉が語る「分かりました」という弟子たちの返事はこの現実には置かれた世界、人類の姿だとも言えるのです。ところが、どうでしょうか。こうして公現日を迎え、どれだけの人たちが主、我らと共にいますことを心に留めているのでしょうか。世界、人類は今年も幼子イエスの誕生をその目で確かに見たのです。それは、世界、人類がこの出来事を見るための目を持っているからです。ところが、今、どれだけの人々がこの方のことを気にかけて、その目で見ようとしているのでしょうか。

イエス・キリストというお方は生まれたには生まれたが、すぐに世に埋没してしまったというのでしょうか。それとも、多くの者が目を塞ぎ、あるいは、別の何かに心を奪われてしまったのでしょうか。現状を踏まえるなら、こう考えざるを得ないのですが、それゆえ、イエス・キリストというお方を見つめる上で必要なことは、その信仰の眼差しということなのです。けれども、数日前に出されたプーチンの停戦命令ではありますが、そこには紛れもなく信仰的な理由がありました。ですから、そういう意味で、この度、ユリウス暦でクリスマスを祝うために出したプーチンの停戦命令は信仰の眼差しをもってのこと、ということにもなりましょう。また、彼は熱心で真面目な正教信者であると言われていています。この度の判断はそれゆえのことだと言われていますが、ところが、そのように考える人は、恐らくは、ウクライナ国民の中には一人おりません。それは、説明するまでもなく、信仰とは、プーチンの野望を支えるものではないからです。ですから、この度の彼の判断については、いみじくも「だったらこ

の国から出て行け」とあるウクライナ国民が言ったように、プーチンが信仰の眼差しをもって、世界、人類を見ているなら、その蛮行こそが改められて然るべきものだという事です。それゆえ、彼には信仰が「分かっていない」、それは明らかなことでもあります。ところが、彼は「分かっている」と思い、しかも、ロシア国民の多くが彼のその考え方を支持しているわけです。そこでもし、彼が天国の鍵を握っていると、彼を支持する人々がそう思っているとしたら、天国の鍵を握る者とは、核のボタンを握る者ということなのではないでしょうか。

このように、分からない人々と、分かっていると思込んでいる人々が私たちの周りを取り囲んでいるわけですから、そこで出番が回ってきたのが、弟子たちと同じように「分かっています」と威勢良くイエス様に返事をする私たちです。ですから、そのためにも私たちは弟子たちと同じようにこの日の御言葉に聞いていきたいと思うのですが、そこで言われていることは天国についての三つの譬え話です。最初の二つは内容こそ違いますが、語らんとしていることは同じです。天国は価値高く、それゆえ、全財産を売り払ってでも手に入れるべきものだからです。ただ、三つ目は、この二つとはいささか趣を異にします。それは、クリスマス前に聞いた毒麦の譬えに通じるものですが、終わりの日が来たなら、良い者と悪い者とが天使たちによってより分けられ、悪い者は打ち捨てられるというのです。そして、そこで忘れてはならないことは、終わりの日が訪れる以前には、良い者も悪い者も、同じ網の中で渾然一体となつてその中に置かれているということです。まさに今世界の置かれた現実そのものと言っているとも言えるのですが、その中でイエス様に尋ねられ、分かったと答えたのがイエス様の弟子たちでもありました。

ただ、そこで二つ大きな問題が出てきます。一つは、「分かった」というのはどういうことなのかということです。それは、

最初に語られている二つの譬え話は確かに分かりやすく、天国が何物にも変えがたいものであることを思えば、誰もが納得し、承服するものだとも言えるのです。つまりは、天の国は「分かりました」と口にする私たちにとっては、あるのかないのか分からないものではなく、今ここに、確かにあるということです。しかし、そう思いながらも、この中で、一体、誰が、はい、分かりましたと言って、全財産を売り払う者がいるのでしょうか。ですから、これは、総論賛成、各論反対という信仰者が陥りやすい状況を現しているとも言えるのですが、つまりは、語られている内容は分かった、でも、それを行動に移すのは難しい、だから、勘弁して欲しい、そういうことを言い表しているとも言えるのでしょうか。つまり、分かったと思っても、実は何も分かってはいなかった、ですから、そのような中で、私たちが「分かった」と口にすることは、まさに語るに落ちるといってもあるのでしょうか。

ですから、そうした状況の中でハラハラしながら、三つ目にある譬え話を聞いていくと、三つ目の譬え話は私たちの心にどのように響くのでしょうか。恐らくは、私たちの多くを安心させることはないのでしょうか。それどころか、私たちが「分かった」と口にしてしまうとすることは、つまりは、私たちが網の中に入っていることを知っているということです。そして、この場にいるほぼ全員は御国の到来を待ち望んでもいるのです。クリスマスにおいて、そのことを繰り返し言葉にし、その言葉をしっかりと胸に刻んできたのが私たちでもあるからです。ところが、その私たちが年が改まるやいなや、御国の到来を喜ぶことができないとしたら、それも、悲しむべきもの、忌まわしいものとまで見なしているとしたら、それはイエス様にとっては実に悲しむべきことでもあるのでしょうか。けれども、もちろん、私たちには、このイエス様の気持ちの方が分かりすぎるくらい分かっています。

す。でも、自分で思うようには動けない、それは、天の御国の値高さは認めながらも、それを手にするためにすべてを捨て去ることができずにいるからです。そして、その理由は、あの「富める青年」のように、私たちが常識に囚われているからでもあるのでしょう。

それゆえ、私たちの常識と理性が私たちの目を曇らせているとも言えるのですが、ただ、そこで一つ言えることは、イエス様の「分かったか」との問いかけは、すべてのものを後ろに投げ捨て、イエス様に従った弟子たちに向かって語られているということです。ですから、「分かった」という一言は、召命というものと深く関わっているわけですが、そして、この召命ということは、私たちそれぞれがそれぞれに与えられた役割を担うということです。そして、私たちがそれぞれの役割を担うのは、私たちが主のものとされたからです。それが、洗礼を受け、古い自分に死んだ、ということでもありますが、従って、そこには御言葉を宣べ伝えるための特別な役割が与えられているかいないかは関係ありません。洗礼を受け、主のものとされたということは、イエス様のお言葉を我が言葉とすることであり、そのお言葉どおりに生きるということでもあるからです。ところが、それができずにいる、それが私たちの多くであり、つまり、イエス様がここで仰る網の中とは、そういう私たちがその中にいるということです。まただから、私も含め、そのことに悩みを深めるわけですが、ですから、そこではっきり言えることは、終わりを見つめる私たちは、終わりが見えているからこそ、このままではいけない、ということです。

ただ、それが分かっている、その答えになかなか辿り着けないのが私たちでもあるのです。まただから、すべてを後ろに投げ捨て、イエス様の救いに与りながら歩まねばならない、救いに与りたいと願う私たちの多くはそう考え、自分を変えること、

変わることをばかりを考えたりもするのですが、特に、私たちプロテスタント教会はその傾向が強いように思います。それは、「改革」ということが教会の旗印であり、それゆえ、現状に甘んじずに常に身を正し改革し続けることが御国を待ち望む上での私たちの姿勢でもあるからです。しかし、それが私たちの心を曇らせているとしたら、信仰とは一体いかなる意味を持つものなのでしょうか。私たちの中でそう思う人は多いように思うのですが、そこでイエス様の仰ったことが天の国のことを学んだ学者についてでありました。それは、イエス様がここで「自分の倉から新しい者と古いものを取り出す一家の主人に似ている」とその道の権威について仰るように、やがて御国の扉が私たちの目の前で大きく開かれるためには、その時までを正しく、ふさわしく導く者の存在が必要だからです。

そして、イエス様は、このことを弟子たちが「分かりました」と語ったその直後に語るのですが、それを語るに際してに、イエス様はそこで「だから」と仰るのです。このことはつまり、ここに、私たちが天の国について「分かる」ということの意味が言い表されているということでもありますが、つまりは、それが、イエス様ゆえの救いと十字架と復活の出来事の意味について「分かる」ということでもあるのです。そして、それについて「分かった」と言っているのがイエス様の弟子たちではありますが、それは誰かとイエス様が弟子たちに念を押して聞いていることから分かります。つまり、私たちの導き手とはイエス様の召しに与る弟子たちであるということです。けれども、弟子たちにはそれができなかった、十字架の出来事がそのことをはっきりと伝えてくれているわけですが、しかし、十字架と復活の出来事を経て、教会が立てられ、明らかに変わっていったのが弟子たちでありました。それは、弟子たちが分かったということでもありますが、一体弟子たちは何が分かったというのでしょうか

か。

弟子たちの「分かった」というこの言葉に偽りはありません。弟子たちはありのままのその気持ちをこう言い表しているのです。しかし、「分かった」と口にした弟子たちがイエス様を裏切ることになったのです。つまりは、実は弟子たちは何も分かっていなかった、弟子たちの上にこの重い事実がのしかかってくることになったのですが、ところが、その弟子たちが変えられていった、網の中とはつまり、変えられている可能性に満ちた場所であるということなのです。それは、この網の中に、イエス様が共におられるからであり、このことはつまり、「分かる」とは、私たちの傍らにあるイエス様を見つめるところから発せられる言葉であるということです。ここで弟子たちが「分かった」と口にしたのは、共にあるイエス様を見つめてのことでもありますが、そして、その弟子たちがイエス様のことを裏切ったのは、イエス様と共にあることを止めたから、イエス様との距離を置いたから、つまりは、イエス様のことが見えなくなってしまったから、裏切ることになった理由は、共にあるイエス様のことを見失うことになったからです。そして、そこで弟子たちは知ったのです。私たちがイエス様を見つめていてもいなくても、イエス様は私たちと共にあるお方である、今までも、今も、これから、良いものであるのか悪いものであるのかも分からないこの私たちと共にいてくださっている、だから、そのことを知った私たちは、弟子たちと同じように、共にあるイエス様によって必ず変えられていく、変わらなければならないと自ら思うのではなく、網の中にイエス様が共にあることを私たちが忘れず、このお方に寄り添い、その御旨を信じ歩むなら、私たちは弟子たちのように変えられ、御国の扉はやがて私たちの目の前で大きく開かれることになるのです。

ですから、「分かる」ということは、共にあるイエス様を見つめることです。今こ

こにイエス様が共にいてくださっているということです。その中で古いものも新しいものも、良いものとしてイエス様が取り上げてくださるのです。この年も、きっといろいろなことが起きるのでしょう。それが何かは私たちにも分かりません。私たちの目が大きく開かれることもあれば、その目を曇らせることもあるのでしょう。けれども、その私たちがイエス様の御心の中に置かれている、だから、その傍らに共にあるイエス様を私たちが見つめるなら、私たちは必ず良いように変えられていくのです。ですから、大切なことは、イエス様と共にある交わりの中に置かれていることを忘れずにいることです。そのことをはっきりと知らされたのがクリスマスシーズンを過ごす私たちでありました。それは、三名の愛する兄弟姉妹を主の御許へとお送りすることになったからです。この、「なぜ」と問うしかない出来事を通して、その私たちとイエス様が共にあること、いてくださっていることを御言葉を通して深く知らされることになったからです。それは、私たちがイエス様というお方を中心にした交わりの中に置かれ、生きているからです。私たちの目の前に御国の扉が大きく開かれるのは、私たちがこの交わりの中にあるからです。

従って、私たちは、分かるか分からないか、変わるか変わらないかに拘りを強くするのではなく、交わりの中にあることをしっかりと見つめるものでありたいと思うのです。そうすれば、すべてのことはイエス様によって必ず明らかにされていく、こうして迎えたこの新しい年も、そのイエス様が私たちのことを導いてくださっている、このことをしっかりとその胸に止め、交わりの中でこの一年を共に過ごす私たちでありたいと思います。祈りましょう。